

BOOK REVIEWS

A Fresh Approach to the Canadian Politics

Reviewed by Akira Nakamura

BOOK REVIEWED：ジョン・H・レデコップ（編），吉田健正・竹本徹（訳），『カナダ政治入門』（東京：お茶の水書房，1989，319 pp., ¥3296）translated from Redekop, John H. ed., *Approaches to Canadian Politics* (Ontario : Prentice-Hall Canada, Inc., 1983)

SUMMARY IN ENGLISH： Canada has not been particularly visible to the Japanese. This is partly because we have generally tended to belittle Canada in favor of the United States and partly because, at least in the area of political science, Canada does not seem to have produced a large volume of academic literature regarding its domestic affairs. In this context, the appearance of the Japanese translation of *Approaches to Canadian Politics*, edited by Professor John H. Redekop, is to be welcomed for the contribution that it will make to Canadian studies in Japan. This important collection of essays was translated by two Canadian specialists, Professors Kensei Yoshida and Toru Takemoto.

In Redekop's own words, this book was written for people with little prior knowledge about Canadian politics. Accordingly, much of the book is devoted to discussions of various approaches to Canadian politics in the hope that it will stimulate general interest in the subject. Part of the 369-page book was deleted from the Japanese edition in the interest of compactness, but the omission is more than compensated for

BOOK REVIEWS

by the efforts of the translators to update parts of the original text with their own notes. The Japanese edition won the 1988 Canadian Prime Minister's Award for Publishing in the translation category.

To this reviewer, five of the nine translated chapters were particularly interesting: "Geography and Politics" by Professor C. F. J. Whebell; "Continentalism: The Key to Canadian Politics" by Redekop; "Canadian Political Economy" by Professor Douglas J. McCready; "Federal-Provincial Relations" by Professor J. Peter Meekison; and "Canadian Political Parties and Elections" by Professor Frederick C. Engelmann. While this reviewer had some reservations about Whebell's conclusion that geography will remain a key determining factor in Canadian politics, Redekop's discussion on the impact of north-south relations across the international border on east-west economic and political ties within Canada is revealing. A parallel could be drawn with Japan's relations with Southeast Asian countries or Tokyo's relations with regional cities within Japan.

McCready convincingly explains the economic reasons behind the "weak" federal system in Canada, a notion that Meekison supplements with his concept of "layer-cake" federalism, which is substantially different from the federal system in the United States. We learn from Engelmann's article that Canada's two-party system is in the process of transformation.

The book is not without its share of weaknesses. For one thing, it does not seem "Canadian" enough; some articles focus more on "approaches" to political studies than on Canadian politics itself. Secondly, there is little organizational continuity from one chapter to another. Thirdly, there is much emphasis on history but very little corroborative analysis. Chapters on the process of legislative policy-making and the bureaucracy would also have been helpful. In spite of these weaknesses, however, there is no doubt that this book will be a valuable addition to the limited collection of

Japanese-language literature on Canada.

カナダは、太平洋をへだてたこちらからは見えにくい国である。これには、われわれの関心が一般的にアメリカに傾斜しがちで、カナダを軽視してきたという事情がからんでいる。また、これまでの日本側のカナダを理解しようとする努力が、かならずしも十分ではなかったという問題もある。ところが、カナダ側にも反省すべき材料が多い。たとえば、政治研究である。限られた経験しか持たないけれども、書評者がカナダで調べた結果からいうと、カナダ政治を紹介した文献はきわめて少ない。その絶対量は、アメリカ政治を解説した資料の比ではない。ことに州政府や都市、あるいは地方政治の資料になると、きわめて心もとない状況にある。

こうした現状をながめると、カナダのひとびとはカナダ政治にどれほどの関心を示してきたのかと疑問さえおぼえる。カナダに詳しい研究者によると、カナダの大学で教える政治学はアメリカの教科書を使い、アメリカを素材にした講義になる例も少なくないということであった。カナダ政治の研究書が限られているという事情を考えれば、これは必ずしも誇張とは思われない話である。

こうしたこれまでの状況を考えると、カナダ政治の紹介を目的としたジョン・H・レデコップ教授編著の『カナダ政治入門』が、今回吉田健正・竹本徹両教授の手によって訳出されたことの意義はきわめて大きい。

レデコップ教授自身の言葉を借りると、同書が編集された意図は、カナダ政治を体系的に紹介した文献がこれまでほとんどなかったことに起因する。レデコップ教授はカナダを素材に、カナダ中心の政治学の入門書を編集することを企図してきた。したがって『カナダ政治入門』は、カナダ政治に関するさまざまな見方やアプローチの紹介に多くの紙数をさき、カナダの政治に対して一般の関心がこれから高まる期待をもつた文献である。カナダ政治を多角的に紹介しようとする、きわめて積極的で意欲的な試みといふことができる。

訳者ののはしがきによると、原著は370頁にもおよぶ大著である。そのため今回の訳出作業では一部が割愛されているが、それでも翻訳された『カナダ政治入門』は、およそ320頁にもなる。大変な労作であ

る。ちなみに訳者についてふれておくと、吉田・竹本の両氏はともに在日カナダ大使館で学術交流にたずさわったあと、現在は桜美林大学でカナダ学を講義するというわが国におけるカナダ研究の指導者である。そのこともあって、『カナダ政治入門』には随所に訳者の注が入って文献を最新のものにする努力がはらわれている。このすぐれた訳出作業によって、吉田・竹本の両教授は 1989 年度の「カナダ首相出版(翻訳部門)賞」を受賞している。

レデコップ教授がはじめにふれているように、カナダ政治をトータルに紹介することを目的にした同書の内容は、バラエティーに富んでいる。参考までにその構成を章題と著者名に限って列記すると、次のようになる。

第一章	カナダの地理と政治	C・F・J・ウェーベル
第二章	カナダ政治の鍵・コンチネンタリズム	ジョン・H・レデコップ
第三章	カナダの政治と経済の関係	ダグラス・J・マククリーディー
第四章	カナダにおけるイデオロギーと政治	ウィリアム・クリスチャン
第五章	カナダの政治制度	ジョン・H・レデコップ
第六章	連邦と州の関係	J・ピーター・ミーキソン
第七章	カナダの政党と選挙	フレデリック・エンゲルマン
第八章	二元国家と統一の概念	デイビット・R・キャメロン
第九章	カナダ政治の権力行使	ウォルター・ヤング

これら九章にまたがるさまざまな業績のなかで、評者が個人的に興味をもった論稿は、第一章と第二章、それに第三章、第六章と第七章であった。そのうち第一章を担当した C・F・J・ウェーベル氏は、「カナダの地理と政治」のなかで資源の分配や人口の偏在などが、カナダの国内政治を律するキー概念であり、カナダ政治の観察で特に注目を要するファクターであることを指摘している。ウェーベル氏によると、カナダの歴史は資源開発や鉄道建設などに代表されるように、自然の克服をめぐる政治的やりとりのくり返しであった。カナダに限ってこの点は今後も変わることはないというのが、同氏の見解である。

ウェーベル氏がいうように、地理は所与のものとしていろいろな国の政治を規定する重要な要件である。その点に異論はないにしても、

今後の状況ということになると、ウェーベル氏の結論には若干の疑問が残る。資源に関する政治が将来にわたっても重要であることは別にして、情報化や自由貿易がさけばれるなか、国境や地勢が今後どれだけ政治的に意味をもつのか、再検討を必要とする問題のように思われる。

これに対してレデコップ氏自身が執筆した「カナダ政治の鍵・コンティネンタリズム」は、自然条件とカナダの国際政治、より具体的にはアメリカとの関係を詳述した論稿である。これが個人的には特におもしろく勉強になった。カナダとアメリカの関係は、重要でありながら屈折してきた。なぜそうなのかについてレデコップ氏は、アメリカとの南北関係が活発になるとカナダの経済や政治は国内での横の連係を薄くしてアメリカに連結し、一体性を失いがちになる(バルカン化)という指摘をしている。

バンクーバーとシアトルの関係、あるいはトロントとシカゴやニューヨークとの関係を考えて、思い当たるところの多い興味ある論点として印象に残った。この視点は、わが国と東南アジア諸国との関係にもあてはまる。また、いま東京プロブレムとして問題になっている東京と地方都市との関係にも似ている。この発想は普遍的な意味をもつた概念枠のように思われる。

これにつづくダグラス・J・マククリーディー教授の「カナダの政治と経済の関係」も興味のある論文である。マククリーディー氏の論点は、「カナダの政治は経済的要因によって大方説明できる」(109頁)という視角を出発点にしている。その上にたって、政党の発展や投票行動をカナダに固有の経済的な問題との関連で説明しようとする。したがって、マククリーディー氏の視点に立つとカナダが“弱い”連邦制(con-federation)という政治体系をとるのも、そもそもは連邦に参加した地域の経済的な性格の違いが大きく関係しているということになる。経済事情が地域によって多様化しているカナダでは、一元化した中央集権国家の成立は考えられないことである。

このマククリーディー論文を下じきにしながら、J・ピーター・ミーキソン教授の第六章「連邦と州の関係」を検討すると、カナダ政治の特異性が一層明確になる。カナダの連邦制は、ほかの国にあまり例を見ない興味ある形態と発展過程を経てきている。連邦と州の間はいわば“love and hate”的関係にある。ミーキソン論文を読んで、カナダの連邦制はアメリカと大きく異なり、二層制(layer cake)の性格の強いフェデラリズムがこれからも継続していくような印象を受けた。

第七章では、フレデリック・エンゲルマン氏が「カナダの政党と選挙」を論じているが、これを読むとカナダの二大政党制がなにかほかの形に移行する変革期にさしかかっているかのような状況が理解できる。連邦レベルに基盤をもつ二大政党と、州レベルで勢力が強い第三政党の進出は、カナダ政治を複雑化していると同時に、“おもしろく”もしている。新民主党や社会信用党のこれから動きに興味がつくる。

ただ、このエンゲルマン論文にもみられるが、『カナダ政治入門』に共通する問題点として、歴史に重きがおかすぎる点があげられる。カナダの政党論をあつかったこの論文ですら、最近の投票行動や数量分析による政党の消長がふれられていない。各政党の絶対得票率や相対得票率あるいは得票数などを一覧表にし、それにもとづく分析があれば、カナダ政党の特色はより分かりやすくなつたのではないかと思う。

労作である『カナダ政治入門』の一部を、しかも断片的にしか紹介できないことに躊躇をおぼえるが、評者とは異なるいろいろな別の読み方もあるに違いない。同書から学ぶべき点がきわめて多いことは、すでにいうまでもなかろう。もっとも、いくつか気になる点があったことも事実である。そのいくつかを結論に代えて、以下にしておきたいとおもう。

一つには、カナダを材料にした入門書でありながら“カナダ性”がまだまだ薄いという印象を受けた。カナダ政治よりも政治のアプローチを紹介した部分が多いと思われる論稿も、なかにはあった。また各章が対象とするテーマに、整合性がとぼしいという感じもぬぐいえなかった。カナダの地理的条件のつぎにコンティネンタリズム、そのあとに経済やイデオロギー、そして政治制度や政府間関係と続くと脈絡を見失ってしまう。政治システム論などに準拠して構成を整理できればとおもう。さらに、すでにふれたが、全体に歴史の部分が多く、実証的分析がほとんど出てこないことも残念である。議会での政策形成や官僚機構の機能なども、一章をおこして紹介する必要があったように思われる。しかしながら、数の限られたカナダ文献に貴重な一冊が加わることになったことはまちがいがない。これに続く研究の先行図書としての意義は大きい。

(Akira Nakamura : Professor, Meiji University, Tokyo)